

地域情報（県別）

【島根】「見る前に跳べ」の精神でへき地、救急、南極でも活動した外科医-三上学・公立邑智病院外科部長に聞く◆Vol.1

「自分のためにやりたいことをやってきただろうか」55歳で南極地域観測隊に応募

2024年10月25日（金）配信 m3.com地域版

島根県隠岐諸島でのへき地医療と東京都での3次救急を経験し、南極に渡って医療活動も行ったユニークな経歴を持つ医師がいる。公立邑智病院（邑智郡邑南町）外科部長の三上学氏は周囲の環境に感化されて医師の道に進み、曲折を経て現在、地元の医療に貢献している。「人の縁に生かされてきた」と話す三上氏が南極に渡った理由とは。「見る前に跳べ」を信条としてきた半生を振り返ってもらった。（2024年9月26日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら



三上学氏（病院ホームページから引用）

医学部を目指す周囲に感化、自治医大へ

——三上先生は島根県邑南町出身で、1992年に自治医科大学を卒業しています。まずは、医師を志した経緯をお聞かせください。

率直にいうと、私の場合は子どものころから「お医者さんになって困っている人を助けたい」といった高尚な思いがあったわけではなく、勉強を続けるうちに医学部進学が選択肢に入ってきた形です。高校のころは文系より理系の方が得意だったのでそのコースに進み、大学受験をしましたが落ち、浪人生活を送るようになりました。実家が広島県との境にあったため、広島の予備校に通い、そこが運営する寮で生活しました。そんな環境下で黙々と勉強するうち、当時でいう東大・医歯薬コースまで上がったんです。

そのコースには医学部受験を希望する人もいたので、私も「感化された」といいますか、医師の道が頭をよぎるようになりました。そして、どこを受けるかを考えたとき、現役で自治医大に入った高校の友人が頭に浮かびました。さらに、予備校の生徒にも自治医大を志望する人がいたので、「じゃあ、自分も受けてみようか」と。

——自治医科大学を卒業後、地元・島根県の公立邑智病院や隠岐病院などに勤務しますが、これは同大の「義務年限」の一環だったのでしょうか。

そうです。私も義務年限の一環として、公立邑智病院や隠岐病院、県立中央病院などに勤めました。中でも勤務歴が長かったのが、島根半島から北へ40~80キロメートルに位置する離島・隠岐諸島にある隠岐病院です。こちらでは医師が不足していたため、病院や県の希望を受けて義務年限の終了後も勤め続け、7年間働きました。結果的に島根県では義務年限の9年に3年ほどを加えて約12年間、地域医療やへき地医療に携わりました。

——三上先生は日本外科学会が認定する専門医です。なぜ、外科を専門にしたのですか。

私のころはまだ研修時に各診療科を回るスーパーローテート方式ではなかったため、学生時に内科と外科のどちらに進みたいか希望を伝える必要がありました。外科を志望したのは、子どものころから手作業が好きで、「外科医であれば自分の長所を生かせるのでは」「手に職をつけられるかもしれない」と考えたためです。

友人のオファーで東京へ、所属は「予想外」の救急最前線

——地域医療への貢献を経て、2006年からは東京に移り、都立墨東病院（墨田区）で働き始めます。

先ほどお話した、自治医大に進学した高校の友人が墨東病院に勤めていたんですね。それで私に「手伝ってくれないか」と2005年に誘われたのですが、当時は義理の母が病気のため手術を受ける必要があり、面倒を見る可能性があることからお断りしました。義母の手術が終わって順調に経過していた2006年、その友人が再びオファーをくれたので「こんなに熱心に声をかけてくれるのなら……」と妻に相談したところ、「あなたが東京に住むことなんて二度となさそうだから行ってみたら」と後押しをしてくれて。当時は子どもがまだ小学校に上がる前で交友関係もさほどなかったので、「確かにチャンスかも」と思い、家族で東京に引っ越ししました。

——過去の報道では、三上先生を「救急のプロ」と紹介していました。

それは、制作側の表現なので（笑）。とはいえ、私が救急に携わっていたのは事実で、墨東病院で所属したのが救命救急センターでした。こちらでは主に命に関わる緊急性の高い人への3次救急を行っていたのですが、それまでに私が島根県で経験したのは2次救急まででした。友人から誘いがあったときは何となく重症度を問わないERかなと思っていたので、これには驚きました。

「え、やったことないよ」と戸惑いましたが、その現場では若い医師が重篤な患者さんに必死に対応していて、私も「これは頑張らないと」と触発されました。最初は勝手が分からず体もうまく動きませんでした。少しずつ慣れていき、「気づけば16年が経っていた」という感じです。医学部に進学したり、へき地で長く診療したりしたこともありますが、救急への道をたどったことも人とのご縁です。私は何か相談があれば基本的にはあまり断らないタイプで、イギリス出身の詩人であるW.H.オーデンが言うところの「見る前に跳べ」というスタンスで人生を歩んできた気がします。

「今度は自分のやりたいことを」55歳で過酷な南極へ

——島根でのへき地医療、東京での救急、そして2022年11月からは南極で医療活動を始めます。「見る前に跳べ」を象徴するような成り行きですね。

南極で医療活動を行う医師がいることは卒後3年目、隠岐病院で働いていたときに知りました。南極地域観測隊・越冬隊の医療隊員だった先生が地元に戻り、内科に勤めていたんです。「医者にはこんな仕事をする人もいるんだな」と、憧憬のようなものを感じた記憶があります。

そのイメージがよみがえってきたのが、墨東病院に勤めて16年近く経ってきたころです。当時は組織変革の兆しがあり、また救命救急センター長を担っていた医師の定年退職が近づいていました。自然に考えると2番手だった私とその役を担う可能性があります。しかし、果たしてそれが本当に良いことなのか疑問に思いました。救命救急センターは若手が活躍しやすい現場なので、むしろ若い人に早めに責任のあるポジションを任せ、長期的にかじ取りを担ってもらった方が組織として良いのではないかと思いました。

加えて、私は当時55歳でした。医師としての半生を振り返ると、いろいろな人のために身を粉にしてきた思いがあります。「でも、自分のためにやりたいことをやってきただろうか」と思い、救命救急センターに搬送される重篤な患者さんたちの姿も浮かびました。人間はいつ、何が起こるか分かりません。海外での医療活動に憧れを感じた自分も再認識して、「よし、やれるときにやりたいことをやろう」と、第64次越冬隊の医療隊員に応募したのです。



三上氏ら第64次越冬隊と南極観測船「しらせ」（本人提供）

◆三上 学（みかみ・まなぶ）氏

1992年自治医科大学卒。公立邑智病院や隠岐病院などを経て、2002年に東京都立墨東病院救命救急センターに勤務。2022年11月から2024年3月まで南極地域観測隊・越冬隊の医療隊員として活動。同年6月から公立邑智病院外科部長。日本外科学会専門医、日本医師会認定産業医、日本DMAT隊員など。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

